

# 劉禹錫「傷往賦」について

後藤秋正

## 一

かつて、妻の死を悼む「悼亡賦」の特質について、漢の武帝・劉徹「悼李夫人賦」、潘岳「悼亡賦」から鮑照「傷逝賦」に至るまでの概観を試みたことがある。<sup>①</sup>「悼亡賦」の制作は、魏晉南北朝期においては鮑照の作品が最後となるが、唐代に至っても、その制作はわずかに劉禹錫（七七二～八五六）に繼承されている。

本稿においては劉禹錫の「傷往賦」（『劉賓客文集』卷一、『劉禹錫集箋證』<sup>②</sup>卷二）を取り上げ、この作品の特質と「悼亡賦」の系譜中に占める位置について考察してみたい。

## 二

はじめに、「傷往賦」の制作時期と対象となった人物についての諸説を整理しておこう。諸説は、この賦が先妻（元配）を傷んだ作品と考えるか、繼妻を傷んだ作品と考えるかによって、大別される。

まず、卞孝萱『劉禹錫年譜』（中華書局、一九六三）は、「傷往賦」の序に、「予授室九年而鰥。」（予室を授かること九年にして鰥たり。）とあることから、「傷往賦」が書かれたのは貞元十七年（八〇二）前後のことであると推定する。従って、彼が最初の妻を娶ったのは、貞元九年（七九三）、

進士に登第した年の前後ということになる。

高志忠『劉禹錫詩文系年』（廣西人民出版社、一九八八）は、この賦を、貞元十七年、三十歳の時のものと推定していて、卞孝萱の説をほぼ踏襲している。『箋證』の考證は、疑問点を残しつつも、より詳細である。

禹錫娶薛謩之長女、見本集卷三「薛公神道碑」。據碑、禹錫之婚於薛氏、在入尚書省爲屯田員外郎之前一年、即貞元二十年（八〇四）也。是時禹錫已三十三歲、恐初娶不應如此之遲。此文云、「授室九年而鰥。」今試推之、禹錫二十二歲登第、若於此時授室、則九年之後爲三十一歲、悼亡之後、間一・二年、乃續娶於薛、於事理較合、故此文似悼其元配而作。文中無一語及於遷謫、尤爲明徵。……但仍有可疑者、本集卷三十有謫居悼往詩、且有「牛衣獨自眠」及「長安遠如日」之語。據此、則禹錫初貶之時、必喪偶而尙未續婚、與薛公碑中語殊有抵觸。豈薛謩以女許字禹錫而未及成婚、彼此睽隔、禹錫遂仍以獨身往貶所耶？又豈婚於薛氏後再度悼亡、故有謫居悼往之詩耶！疑莫能明、特拈出以俟知者。

ここに言う「薛公神道碑」とは、開成三年（八三八）、薛謩のために撰した「唐故福建等州都團練觀察處置使福州刺史兼御史中丞贈左散騎常侍薛公神道碑」（『箋證』卷三）を指していて、ここでは、「初公治粟于朔陲、

……謂可妻也、以元女歸之。明年、愚人尙書爲郎。」(初め公は粟を朔陞に治む、……妻めあわす可しと謂おもい、元女を以て之に歸かへがしむ。明年、愚 尙書に入りて郎と爲る。)と言っており、「郎」となったというのは、貞元二十一年(八〇五)に屯田員外郎に轉じたことを指しているから、前年の貞元二十年、三十三歳の劉禹錫が、薛謩の「元女」と結婚したのは確かである。

初婚が、『箋證』の指摘するとおり貞元九年、進士登第のころであると假定すれば、「傷往賦」の制作は貞元十八年のこととなって、下孝萱・高志忠兩氏の推定と大差はない。ただし、『箋證』も言っているように、劉禹錫には、永貞元年(八〇五)冬、朗州司馬に左遷されたのちに作られたとされる「謫居悼往二首」(『箋證』卷三〇)があり、この詩について『箋證』は、朗州左遷直後の作品であるとみなして、「按、此詩兼遷謫與悼傷兩意。長沙泛指楚地、暗以賈誼爲比、當是初到朗州時作。與本集卷一傷往賦參看、似禹錫初謫朗州時繆居。」と言っている。確かに劉禹錫が先妻を喪つてのち、貞元二十年に繼妻の薛氏を娶つた翌年、貞元二十一年(永貞元年)の朗州左遷後まもない時期に、先妻の死を傷んだこのような「悼往詩」が書かれたとすれば、それは不自然である。

これらの見解に對して、陶敏・陶紅雨『劉禹錫全集編年校注』(岳麓書社、二〇〇三)は別の見解を述べる。氏は、「傷往賦」が初婚の相手である薛氏を傷んだ賦であるとみなし、「元和七年在朗州作。……元和七年劉禹錫妻薛氏卒于朗州、賦爲此而作。」と言つて元和七年(八一二)制作説をとり、「謫居悼往二首」についても、「詩元和七年在朗州作。……詩爲悼念亡妻薛氏而作。」と言っている。ただし、同書の「薛公神道碑」の注では、「劉禹錫貞元二十年爲監察御史始與薛謩女結婚、時已三十三、故瞿蛻園『劉禹錫集箋證』疑劉禹錫前此已婚姻史。」と、瞿蛻園氏の説に言及しているように、薛氏が繼妻であることを全面的に否定しているわけではない。また、王貴斌『劉禹錫的妻室問題』(『唐代詩人婚姻研究』群言出

版社、二〇〇四)も、この賦が薛氏を傷んだ作品であるとみなし、特に下孝萱『劉禹錫年譜』の所説を批判して、まず『傷往賦』中所傷的那位妻子、即爲元配。其實下『譜』的這一結論除爲劉禹錫一生兩娶爲正確外、其餘爲全部誤。」と述べ、この賦は繼妻の薛氏を傷んだものであり、二人が結婚したのは貞元二十一年の秋、薛氏の死は元和八年、賦が制作されたのは元和九年の秋であると結論づける。

果たして、高志忠・瞿蛻園兩氏が言うように、「傷往賦」は、彼が三十歳か三十一歳のころに姓名不詳の先妻を傷んで作つたと考えるのが妥當なのか、陶敏・陶紅雨兩氏と王貴斌氏が言うように、元和七年、もしくは九年に薛氏を傷んで作つたとするのが正しいのか、なお判然としない。しかし、のちにも觸れるが、「系」の内容からしても先妻を傷んだ賦とみなすのが自然ではなからうか。そうであるならば、劉禹錫は貞元十六年(八〇〇)、三十歳の時には淮南節度使掌書記として揚州の杜祐の幕府におり、翌年には京兆府渭南縣主簿として長安にもどつていた。

では「謫居悼往二首」の存在をどのように考えればよいのであろうか。『箋證』などがこの詩を朗州左遷直後の作品であると見なすのは、詩の配列順に影響されているのではないだろうか。確かに『劉賓客文集』卷三十では、この詩のすぐあとに、「哭呂衡州、時余方謫居」(『箋證』卷三〇)が置かれていて、詩題に「時に余方めて謫居す」とある。呂溫は、元和六年八月に没している。だからといって「謫居悼往二首」までもが朗州左遷直後の詩であると限定して考える必然性はないのではなからうか。ここで注意されるのは、中原健二「詩人と妻」の示唆である。中原氏は「謫居悼往二首」を、朗州に流されていた時期の中でも、おそらくはその早い時期のものであろうと推定してはいるが、この詩の對象については、「薛氏であろうと思われるが、確かではない。」と述べている。つまり、中原論文だけが「傷往賦」と「謫居悼往二首」の對象は別人で

あるとする可能性を示唆していることになる。この示唆はきわめて重要である。劉禹錫は先妻のために「傷往賦」を書き、没年は不明だが朗州左遷中に亡くした繼妻の薛氏を悼んで「謫居悼往二首」を書いたと考えられるからである。ただし、「謫居悼往二首」は、詩題に「悼往」とあるところから悼亡詩であるとみなされるのであつて、内容から見ると謫居中の孤獨感の表出に重きが置かれていて、悼亡の念は稀薄である。

『箋證』が指摘している「牛衣獨自眠」の句にしても、妻の逝去後の悲哀を言うよりも、自身が病みがちで孤獨であることを強調していると考えた方が理解しやすい。そもそも「牛衣(牛衾)」の語は、『漢書』卷七十六、王章傳の逸話に基づいて、困窮した境遇や寒士を指すようになった。例えば袁朗「和洗椽登城南坂望京邑」(『全唐詩』卷三〇)では、「狐白登廊廟、牛衣出草萊」(狐白は廊廟に登り、牛衣は草萊より出づ)と言う。また、李群玉「將離澧浦置酒野嶼奉懷沈正字昆弟三人聯登高第」(『全唐詩』卷五六八)では、「無燈假貧女、有淚沾牛衾」(燈無くして貧女に假り、涙有りて牛衾を沾す)と言っている。いずれも、悼亡とは關係なく用いられているのである。こゝでさらに注意しておきたいことは、「傷往賦」の「糸」の冒頭に、「龍門風霜苦、別鶴哀鳴夜銜羽、吳江波浪深、雌劍一去無遺音」(龍門 風霜苦しく、別鶴 哀鳴して夜羽を銜む、吳江 波浪深く、雌劍 一たび去つて遺音無し)と言っていることである。「龍門」は、彼の「望賦」(『箋證』卷一)に、「望如何其望最傷、俛環玦兮思帝鄉、龍門不見兮、雲霧蒼蒼」(望 如何 其の望 最も傷まし、環玦を俛ちて帝郷を思ふ、龍門 見えず、雲霧 蒼蒼たり)と言うように、帝都、もしくは故郷の象徴であつた。そうである以上、「吳江」は、彼が実際に目にした揚州近邊の河川を言うのではなからうか。「龍門」と「吳江」が彼の實體験と結びついているとすれば、この句は、揚州在任中に亡くなった先妻を、長安か洛陽で傷んだことを示唆していると考えられるからである。

劉禹錫「傷往賦」について

### 三

ここで「傷往賦」を、『箋證』に従つて段落ごとに區切りながら見てゆくこととする。この賦の序文は、妻を天逝させた悲哀から容易に抜け出せないことと、妻の存在の持つ重みを述べる。

人之所以取貴於飛走者、情也、而誕者以遣情爲智、豈至言耶。予授室九年而鰥、痛若人之天闕弗遂也。作賦以傷之、冀夫覽者有以增伉儷之重云。

人の貴きを飛走に取る所以の者は、情なり、而るに誕る者は情を遣るを以て智と爲す、豈に至言ならんや。予 室を授かること九年にして鰥たり、かくの若き人の天闕して遂げざるを痛むなり。賦を作りて以て之を傷み、夫の覽る者の以て伉儷の重きを増さんこと有るを冀うと云う。

「増伉儷之重」の句については直接の典據は見當らないが、白居易「和微之聽妻彈別鶴操、……、依韻加四句」(『全唐詩』卷四四四)の冒頭には、「義重莫若妻、生離不如死」(義の重きは妻に若くは莫く、生離は死に如かず)という、妻の存在の重きを率直に詠ずる句が見えている<sup>⑤</sup>。續いて本文に入ろう。

歎獨處之悵悵兮、憤伊人之我遺。情可殺而猶毒、境當歡而復悲。人或朝歎而暮息、夫何越月而逾時。太極運乎三辰、轉寒暑而下馳。有歸於無兮、盛復于衰。猶味爽之必暮、又安得而怨咨。我今怨夫若人兮、曾旭旦而潛暉。飄零日及之萼、倏忽蜉蝣之衣。川走下而不還、

露迎暘而易晞。恩已甚兮難絕、見無期兮永思。

獨處の悵悵たるを歎じ、伊の人の我を遺すを憤む。情は殺ぼす可きも猶お毒い、境は當に歡ぶべきも復た悲しむ。人或いは朝に歎きて暮れに息む、夫れ何ぞ月を越えて時を逾えん。太極は三辰を運らし、寒暑を轉じて下に馳す。有は無に歸し、盛は衰に復す。猶お味爽の必ず暮るるがごとし、又安くにか得て怨咨せん。我 今夫のかくの若き人の、曾ち旭旦にして暉きを潜むるを怨む。飄零す日及の萼、倏忽たり蜉蝣の衣。川は下に走つて還らず、露は暘を迎えて晞き易し。恩は已に甚だしくして絶え難く、見うに期無くして永く思ふ。

第一段落（第二〇句）は、時節がめぐり、萬物が衰えることは當然の理であることを自身に納得させようとはしても、妻が自分を殘して逝ってしまったことをうらみなげく氣持ちは盡きないことを言う。「悵悵」は『大戴禮記』曾子制言中に見える語。「伊人」はこの人。『詩經』秦風・兼葭の語。ここでは亡き妻を言う。「太極」は、『易』繫辭上傳の語。「三辰」は、日、月、星。『左傳』桓公二年の條などにある。「味爽」は、拂曉。『尚書』周書・牧誓に見える。「怨咨」は、『尚書』周書・君牙の語。「飄零」は、司馬相如「美人賦」（『藝文類聚』卷一八）をはじめとして用例は多い。「日及」は木槿。自注に、「日及、槿也。朝生暮落、一名王蒸。爾雅。」（日及は、槿なり。朝に生じて暮れに落つ、一名王蒸。爾雅。）と言ふ。これと對になる「蜉蝣」は、かげろう。『詩經』曹風・蜉蝣に見える。

我行其野、農民桑者、擧校來鮪、亦在林下。我觀于途、裨販之夫、同荷均挈、荊釵布襦。羽毛之蕃、鱗介之微、和鳴灌叢、雙泳漣漪。薨薨伊蟲、蠢蠢伊豸、遊空穴深、兩兩相比。何動類之萬殊、必雄雌而與俱。物莫失儷以孤處、我方踽踽而焉如。

我 其の野を行くに、農民の桑む者は、校を擧げ來りて鮪し、亦 林下に在り。我 途に觀るに、裨販の夫は、同に荷い均しく挈ぐ、荊釵と布襦と。羽毛の蕃く、鱗介の微なるものも、灌叢に和らぎ鳴き、漣漪に雙び泳ぐ。薨薨たるは伊れ蟲、蠢蠢たるは伊れ豸、空に遊び深きに穴ち、兩兩 相い比ぶ。何ぞ動類の萬殊なる、必ず雄雌にして與俱にす。物として儷を失いて以て孤處する莫し、我方に踽踽として焉くにか如かん。

この段落（第四〇句）は、人間はもとより、蟲などの微小な生物までもが、すべて伴侶とともに生きていられるにもかかわらず、自身は孤獨であることを訴える。

「桑」を動詞として用いる例は、宋玉「登徒子好色賦」（『文選』卷一九）などに見える。「擧校來鮪」は、『後漢書』卷八十三、梁鴻傳に見える梁鴻の妻の孟光の故事を踏まえる。鮪は、『詩經』豳風・七月に見える語。「裨販」は、夫婦で行商する小あきんど。張衡「西京賦」（『文選』卷二）に、「裨販夫婦」の語がある。「和鳴」は、『詩經』周頌・有瞽などに見える語。「灌叢」は、張衡「西京賦」（『文選』卷二）に見えている。「漣漪」は、さざ波がたつさま。『詩經』魏風・伐檀に基づく語。「薨薨」は、『詩經』周南・螽斯、齊風・鷄鳴に見える。「蠢蠢」は、潘岳「馬汧督誄」（『文選』卷五七）に、「蠢蠢犬羊」（蠢蠢たる犬羊）とある。「豸」は、『楚辭』九思・怨上に、「蟲豸」という形で見える。「孤處」は、孤棲と同じ。曹丕「寡婦詩」（『藝文類聚』卷三四）に、「徒引領兮入房、竊自憐兮孤棲」（徒に領を引きて房に入り、竊かに自ら憐れみて孤棲す）とある。「踽踽」は、『詩經』唐風・杕杜、「孟子」盡心下などに見える。第二十九句から第三十六句にかけては、鳥や魚、そして蟲たちまでもが伴侶とともに過ごしていることを言う。

我復虚室、目淒涼兮心伊鬱。心伊鬱兮將語誰、坐匡牀兮撫嬰兒。何所句沐兮、何從仰飴。襦袴在身兮、昔園差跌。鞶囊附臂兮、餘馥蕙蕤。誠天性之潛感、顧童心兮如疑。嗟然有難繼之慕、漠然減好弄之姿。指遺桂兮能認、遡空帷兮欲歸。

我 虚室に復り、目は淒涼として心は伊鬱す。心 伊鬱して將た誰にか語らん、匡牀に坐して嬰兒を撫つ。何の沐を句う所ぞ、何に從りてか飴を仰まん。襦袴は身に在るも、昔園と差跌す。鞶囊 臂に附くれば、餘馥 蕙蕤たり。誠に天性の潛感あり、童心を顧みて疑うが如し。嗟然として繼ぎ難きの慕有り、漠然として弄を好むの姿を減ず。遺桂を指しては能く認め、空帷に遡いては歸らんと欲す。

この段落（第五六句）は、遺兒が母を慕う姿を見ては改めて孤獨をかみしめ、悲哀がかきたてられることを述べる。「虚室」は、『莊子』人間世篇に、「空室」ならば潘岳「悼亡賦」（『藝文類聚』卷三四）に見える。「句沐」は、「丐沐」と同じ。『史記』卷四十九、外戚世家に見える寶皇后の弟、寶廣國の言葉に基づく。「襦袴」は、『禮記』内則に、「十年、出就外傳、居宿於外、學書記、衣不帛襦袴。」（十年にして、出でて外傳に就き、外に居宿し、書記を學ぶ、衣は帛の襦袴せず。）とある。「昔園」の語ははつきりしない。この句は劉禹錫が悲しみの餘り瘦せ細つたことを言うのであろうか。「鞶囊」は、香料などをいれる小さい皮ぶくろ。妻が身につけていた物であろう。『魏志』武帝紀の裴松之注に引く「曹瞞傳」に「小鞶」の語がある。「誠……」の句もはつきりしないが、妻の資質が子供に受け継がれていることを言うのであろう。「天性」は、『孟子』盡心上の語。

「嗟然」は、嗟嘆ならば、『詩經』豳風・鴟鴞に見える。ここは遺兒が不安げに泣くさまを言うのであろう。「難繼之慕」は、子どもが母を慕って

いるのに、父としては母の役割を繼承しにくいことを言うのであろう。「漠然」の句は、泣いていた子が、ある時にはじつとして日ごろ好んでいた遊びもしないことを言う。「好弄」は、『左傳』僖公九年の條にある語。顏延之「陶徵士誄」（『文選』卷五七）にもこの語がある。第四十五句の「遺桂」と似た「遺挂」は、潘岳「悼亡詩三首」〈其の一〉（『文選』卷二三）に見える。ただし、この句ばかりではなく、第三十九・四十句も潘岳の「悼亡詩」を意識しているであろう。「空帷」は、張華「情詩五首」〈其の二〉（『藝文類聚』卷三二）に見える。

我入寢宮、痛人亡兮物改其容。寶瑟僵兮弦柱絕、瑤臺傾兮鏡奩空。寒鑪委灰、虛幌多風。隙駟晨轉、窗蟾夜通。步搖昏兮網黏翡翠、芳褥掩兮塵化蛩蛩。閔刀尺之餘澤、見巾箱之故封、玩服儼兮猶具、繁華謝兮焉從。想翩躚於是非、求僊宰與冥蒙。信奇術之可致、嗟此生兮不逢。徒注視以寂聽、恍恍神疲而目窮。還抱影以獨出、紛百哀而攻中。

我 寢宮に入り、人は亡くして物は其の容を改むるを痛む。寶瑟僵れて弦柱絶え、瑤臺傾きて鏡奩空し。寒鑪 灰に委ね、虚幌 風多し。隙駟 晨に轉じ、窗蟾 夜に通ず。步搖は昏くして網は翡翠に黏き、芳褥は掩われて塵は蛩蛩と化す。刀尺の餘澤を閔、巾箱の故封を見る。玩服は儼として猶お具わるに、繁華は謝りて焉くにか從わん。翩躚を是非に想い、僊宰を冥蒙たるに求む。奇術の致くべきを信するも、此の生の逢わざるを嗟く。徒に注視して以て寂かに聽けば、恍恍として神は疲れて目は窮しむ。還た影を抱いて以て獨り出づれば、紛たる百哀は中に攻る。

最終段落（第七八句）は、妻の寢室にもどり、妻の遺品などを見ては

悲嘆に沈むことを言う。

「寢宮」は、『呂氏春秋』用民などに見え、ここは妻の寢室を言う。第四十六句は、『荀子』哀公篇の孔子の語を踏まえて工夫を加えた、やや常套的な句である。潘岳『悼亡賦』（『藝文類聚』卷三四）にも、「物未改兮人已化。」（物は未だ改まらざるに人は已に化す。）と見える。「寶瑟」は、ことの美稱。『漢書』卷六十八、金日磾傳に基づく。「瑤臺」は、化粧臺の美稱。「鏡奩」は、鏡を入れる箱。「鏡奩」と同じ。『後漢書』卷十上、光烈陰皇后傳に、明帝・劉莊の、陰皇后を追慕しての行動を描寫する一文に見えている。「虚幌」は、ひと氣のない窓のとばり。江淹『雜體三十首』王微君・養疾（『文選』卷三一）に見えている。「隙駟」は、「隙駒」と同じく月日の過ぎ去ることの早い喩え。『禮記』三年間に、「則三年之喪、二十五月而畢、若駟之過隙。」（則ち三年の喪は、二十五月にして畢る、駟の隙を過ぐるが若し。）と云うのを踏まえる。第五十三・四句は、時間が刻々と経過してゆくことを言うのであろう。「芳褥」は、劉禹錫の工夫になる語。妻のしとね。第五十六句について、『箋證』は、以下のように指摘する。

即『爾雅』釋地之邛邛岨虛、是一種獸名、據說與蹇共同生活。『山海經』作蛩蛩。但在此處恐不如此解、蛩似指鳴蟲、上一字或是別一字、方能與上文翡翠爲對偶。

この推定には一定の根拠があり、確かに、劉禹錫『秋聲賦』（『箋證』卷一）には、「夜蛩鳴兮機杼促、朔鴈叫兮音書絕」（夜蛩鳴きて機杼促され、朔鴈叫びて音書絶ゆ）という句が見えている。ただし、「蛩蛩」と「比翼」を對にした例は、嵇含『仇儷詩』（『藝文類聚』卷四〇）にすでに見えている。「巾箱」は、婦人の頭巾などをしまふ小箱。『漢武內傳』（『太平御覽』

卷七一引）などに見える。「是非」は、漢の武帝の「詩」（『漢書』卷九七上、李夫人傳）の、「是邪非邪、立而望之、偏何姍姍、其來遲」（是か非か、立ちて之を望めば、偏に何ぞ姍姍として、其れ來ることの遅き）の句を踏まえるのであろう。「恹宰」は、不安な音や聲をたてるさま。ここは亡き妻の悲しげな姿を言うのであろうか。「奇術」の句は、劉宋の孝武帝・劉駿が殷淑儀の死を悼んだ「擬漢武帝李夫人賦」（『藝文類聚』卷三四）はもとより、鮑照『傷逝賦』（『藝文類聚』卷三四）にも、漢の武帝・劉徹の「李夫人賦」（『漢書』卷九七上、李夫人傳）に言及する箇所があった。潘岳の「悼亡詩」が念頭にあれば、當然、漢の武帝と方士の少翁をめぐる故事にも連想は働いたであらう。「抱影」は、「抱景」と同じ。『楚辭』哀時命に、「廓抱景而獨倚兮（廓として景を抱いて獨り倚る）と云う。第六十八句は、劉禹錫「祭柳員外文」（『箋證』外集、卷一〇）にも、「百哀攻中。」（百哀中に攻る。）と見えており、もろもろの哀しみが心に迫ることを言う。最後に「系」を見よう（冒頭の四句はすでに引いたので省略する）。

系曰、……悲之來兮憤予心、洵如行波滄浸淫、悵緣情而莫極、思執禮以自箴、已焉哉、冉冉生死、悠悠古今、乘彼一氣兮、聚散相尋、或鼓而興、或罷而沈、以無涯之情愛、悼不駐之光陰、諒自迷其有分、徒終怨於匪忱、彼蒙莊兮何人、予獨累歎而長吟。

系に曰う、悲しみの來るや予が心を憤えしめ、洵として行波の滄りに浸淫するが如し、悵として情に緣りて極まる莫きも、執禮を思いて以て自ら箴しむ、已んぬるかな、冉冉たる生死、悠悠たる古今、彼の一氣に乗じて、聚散をば相い尋ねん、或いは鼓つて興り、或いは罷れて沈む、涯無きの情愛を以て、駐まらざるの光陰を悼む、諒に自ら其の分有るに迷い、徒に終に忱ならざるを怨む、彼の蒙莊は何人ぞ、予獨り累りに歎きて長吟するのみと。

賦の末尾に「系」を置くのは漢・武帝の「李夫人賦」が、「亂」をもつて一篇を締め括るのを意識したものであろう。「吳江」が揚州付近の河川を指すと考えられることはすでに述べた。「遺音」は、ここは潘岳「悼亡詩三首」〈其の三〉(『文選』卷二三)に、「寢興目存形、遺音猶在耳」(寢興にも目に形を存し、遺音は猶お耳に在り)と云うように、「雌劍」が妻を指す以上、死者の生前の言葉の意味も含む。「執禮」は『論語』述而篇を踏まえる語。「一氣」は、『莊子』大宗師篇中の語。「匪忱」は、不誠實なことを。潘岳「寡婦賦」(『藝文類聚』卷三四)に、「哀天難之匪忱」(天難の忱ならざるを哀しむ)とあるのを踏まえる。「蒙莊」以下は、潘岳「悼亡詩三首」〈其の二〉(『文選』卷二三)に、『莊子』至樂篇に言及するのを踏まえて、劉禹錫自身は、莊子が妻の死後、箕踞しながら盆を鼓して歌つたようには悲哀を超克できないことを述べて、「系」を結ぶのである。

#### 四

さて、「傷往賦」には、さまざまな典據がちりばめられていた。當然のことながら劉禹錫自身の悲哀の描寫にも力が注がれてはいるが、むしろ、多様なジャンルの作品からいかに多くの典據を取りこむかに腐心しているように見受けられる。それは特定の典據を頻用するといった態度が見られないことからうかがえよう。もちろん、これが悼亡の賦であるからには、その嚆矢となった漢の武帝・劉徹の「悼李夫人賦」と潘岳の悼亡の諸作品がまず念頭に置かれるのは當然とも言える。そして実際に潘岳の悼亡の諸作を踏襲する部分があることは事實である。だからといって、劉禹錫は潘岳の詩文にとりたてて執心していたわけではない。管見によれば、彼の詩賦中に潘岳の名が表れるのは以下の七例である。

- ① 公治本非罪、潘郎一爲民 公治 本と罪あるに非ず、潘郎一たび民と爲る(「送華陰尉張若赴邕府使幕」)
- ② 屈平顛顛顏、潘岳歲寒思 屈平 顛顛の顔、潘岳 歲寒の思い(「謫居悼往二首」〈其の一〉)
- ③ 潘園觀種植、謝墅閱池塘 潘園 種植を觀、謝墅 池塘を閱(「和樂天洛城春齊梁體八韻」)
- ④ 廷尉張羅自不關、潘郎挾彈無情損 廷尉 羅を張るも自ずから關せず、潘郎 彈を挾むも無情にして損なわる(「百舌吟」)
- ⑤ 陶廬樹可愛、潘宅雨新晴 陶廬 樹 愛すべく、潘宅 雨新たに晴る(「和樂天閑園獨賞八韻。前以峰鶴拙句寄呈、今辱蝸蟻妍詞見答、因成小巧、以取大哈」)
- ⑥ 今朝比潘陸、江海更滔滔 今朝 潘陸に比す、江海 更に滔滔たり(「浙西李大夫示述夢四十韻并浙東元相公酬和、斐然繼聲」)
- ⑦ 異宋玉之悲傷、覺潘郎之么麼 宋玉の悲傷するを異とし、潘郎の么麼なるを覺ゆ(「秋聲賦」)

これらのうち、①と⑦は『晉書』潘岳傳を、②は「秋興賦」もしくは「懷舊賦」を、③は「秋興賦」を、④は『世說新語』容止篇を、⑤は「閑居賦」を、⑥は「詩品」を、⑦は「秋興賦」をそれぞれ踏まえている。こうしてみると劉禹錫は潘岳の文學について、比較的「秋興賦」に關心を有していたことがわかるが、悼亡の諸作に格別の關心があつたとは言えない。したがってこのことが逆に、彼の「傷往賦」が、潘岳の「悼亡賦」及びその他の悼亡の諸作とは異なり、葬祭の情景には一切言及しないという別の特色を示すことにつながつた、とも言えるであろう。また、許結・郭維森『中國辭賦發展史』(江蘇教育出版社、一九九六)はこ

の賦を要約しつつ、次のように指摘している。

又寫「我行其野、農民桑者、……」。不僅睹物思人、而且從生活中觀察、見到農夫商販夫婦和美的情形、更觸動了作者的思念。這種由平民生活引起的感受爲過去悼亡作品所未見、其他作品也罕有。

しかし、ここに取り上げられている「平民」の描寫も、伴侶をもつ多数の人々の中の一例として農民と商人を取り上げたものであり、「平民」でさえも伴侶をもっていることを述べて、自己の孤獨を強調して悲哀に沈潜するのであって、このことを必要以上に重視するのは問題がある。したがって「悼亡賦」の傳統が、「傷往賦」が制作されたことによつて唐代に繼承されたことは、確かに注意されなければならないにしても、この作品が彼以前の「悼亡賦」に比して格段に生彩を放っているとは言えないだろう。

これと關連して、中原健二「詩人と妻」<sup>⑥</sup>は、唐代の、戴叔倫、韋應物、孟郊、劉禹錫、獨孤及、元稹らの「悼亡詩」を取り上げて、以下のような注目すべき指摘をしている。

「悼亡詩」三首の連作は、たとえば、妻の生前の姿を形象化するというような方向では作られていない。季節の移ろいを背景に、妻を失つた悲しみそのものを表現することにひたすら没入している。亡き妻そのものではなく、〈妻の不在〉に關心が集中しているかのようである。〈悼亡〉は中唐期に至つて、共時的現象となり、士大夫たちは、潘岳以來の詩や辭賦のみならず、墓誌銘や祭文という形式までも使つて、亡き妻を語りはじめたのである。

「傷往賦」には、生身の妻の姿が登場することはなかった。このことは、この作品が、劉禹錫の文學にいつその深みを與え、自己を確立してゆく契機となつた永貞の改革の頓挫と、それに續く朗州左遷以前の作品であると考えられることも關わるであろう。さらに、唐代、それも中唐以後に「亡妻墓誌銘」の變化が始まつたことを、野村鮎子「唐代亡妻墓誌銘考」(『學林』二八・二九、中國藝文研究會一九九八・三)も指摘している。<sup>⑦</sup>

これらの指摘をも考え合わせるならば、劉禹錫が亡き妻を哀悼する「傷往賦」を制作した時期は、中唐期に至つて悼亡の諸文體が妻の存在そのものを描くようになって大きな轉換を見せ始める、まさにその胎動期に當つていたと言えるであろう。劉禹錫ののち、唐代においては悼亡の賦は見られなくなる。再び悼亡が賦によつて詠じられるのは、黃庭堅「悼往賦」(『古賦辨體』卷八、『歷代賦彙』外集、卷二〇)に至つてからである。さて、劉禹錫は會昌二年(八四二)に、七十一歳で世を去つた。病んだ彼はこの年に、「子劉子自傳」(『箋證』外集、卷九)を書いてゐる。しかし、「自傳」では先妻と繼妻の存在には一切觸れられていない。彼がこれを書いたとき、三十年ほど前に逝つた妻の姿は、既に忘却のかなたにあつたのであろうか。

## 注

- ① 拙稿「悼亡賦論—漢代から梁代まで」(『中國中世の哀傷文學』研文出版、一九九八所收)。
- ② 以下、引用は主として瞿蛻園『劉禹錫集箋證』(上海古籍出版社、一九八九。以下『箋證』と略稱)による。
- ③ 中原健二「詩人と妻—中唐士大夫意識の一断面」(『中國文學報』四七、一九九三)。
- ④ 卞孝萱『劉禹錫年譜』(中華書局、一九六三)は貞元十二年の條に、『集



異記』（『太平廣記』卷四二二引）を引いて、劉禹錫の舊宅が洛陽附近にあったことを指摘する。

⑤ 前掲中原論文は、「中唐の士大夫たちは、個人としての生活やそこから生じる私的な感情を、価値の劣るものだと見做さなくなったのである。私的な生活や感情も、やはり彼らの世界の一部であり、それは官僚としての公的な世界に對置し得るものなのであった。」と指摘する。

⑥ 前掲中原論文、注③参照。

⑦ 野村論文は、「六朝から初唐の文人にとつては、亡妻墓誌銘よりも詩や

賦による追悼の方が現実的な選擇であつたらう。墓誌銘のもつ文學的意味が大きく變化するのは唐、特に古文復權運動の起こつた中唐以後のことである。」と言う。また、「詩でも賦でもない文のジャンル、すなわち墓誌銘や祭文では亡妻はどのように描かれるか、これを論じたものは、未だない。」と述べているが、これに言及したものは前掲中原論文があり、關連する論文には、趙超「由墓志看唐代的婚姻狀況」（『中華文史論叢』一九八七年 第一期、上海古籍出版社）がある。

（北海道教育大學札幌校教授）